



今回のテーマ『磯節』育った
祝町と大洗下

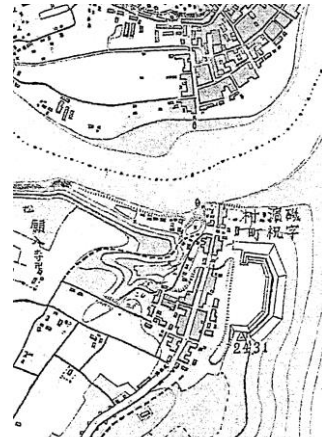
明治18年『迅速測図 桑村磯浜村』部分

明治4～13年頃の祝町の街並み



本通り。南から北をのぞみ、奥が那珂湊。

2001『大日本全国名所一覧』より転載



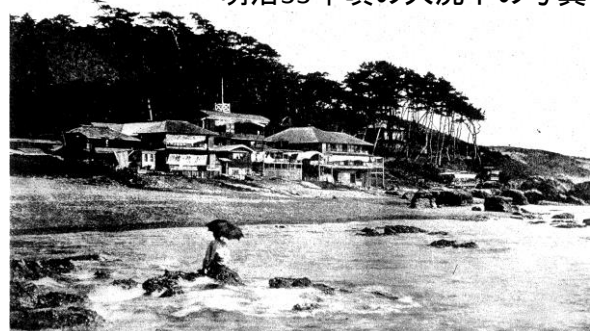
明治18年の祝町の街並み

祝町の情景

街の両側に五軒ばかりの妓楼が物語めいた格子戸に中の仄暗(ほのぐら)さを覗はせて。浴衣を着た屋の遊女がはしたない姿して何か語り合って居たりする。妓楼に並んで場末の小料理屋を見る様な引手茶屋の幾つかが都人士の諧謔(かいぎやく、※ユーモア)を待つように立って居る。とある引手茶屋と妓楼の間からひょっこり現れたキビキビした漁夫の若者が妓楼の格子戸を一寸(ちよつと)覗いて手招きした。黙ってそとと格子戸の中に近づいた二十許りの小綺麗な女はやはり手を持って何かの合図をする。若者は大きく頷いて元来来た方へ引き返した。『磯で咲く花、湊で散って、落ちて流れて、祝町』と磯節に云ふ心行きが可憐な思ひを強いて来る。

大正5年7月9日「避暑地めぐり 三線の情景(4)」『読売新聞』朝刊

明治33年頃の大洗下の写真



大洗磯前神社を中心に、
小林楼・金波楼・魚来庵・魚来庵東屋などの海水浴旅館が並ぶ。

明治33年『地理写真帖 内国之都第三帙』より

大洗磯前神社

- ・明治3年、大規模修理が行われる(大洗磯前神社蔵『大洗大神宮遷宮時村役人世話人諸職人名記』)
- ・明治18年4月、社格が県社から国幣中社に昇格し、田口秀實宮司が就任。



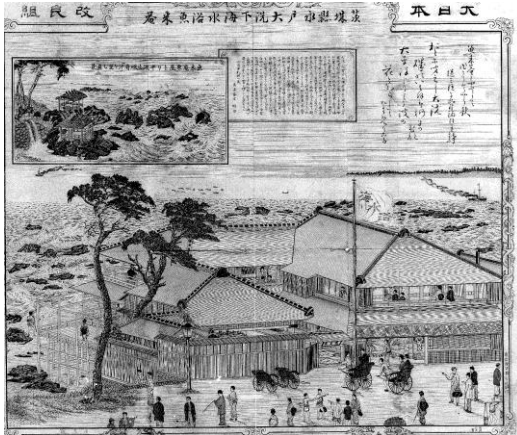
田口照 明治21年8月『国幣中社大洗磯前神社真図』より

魚来庵の開業・展開

- ・開業は、嘉永3(1850)年3月。
※一説には、慶應元(1865)年とも。
- ・料理店として開業。
- ・明治3年、大洗磯前神社の修理に伴い、江戸屋・小林屋・杵屋・大和屋と共に、「魚来屋」として奉賛。
※「魚来」の初出。
- ・明治3年、旅店を兼業するようになる。



明治36年【茨城県名士肖像録】
魚来庵主人 川崎伝兵衛氏



魚来庵本館と東屋

越川行雄氏所蔵 明治28年頃

茨城県水戸大洗下海水浴魚来庵

- ・魚来庵主である川崎伝兵衛氏が製作したもの。
- ・「征清凱旋の歳」とあるため、明治28年頃の発行。

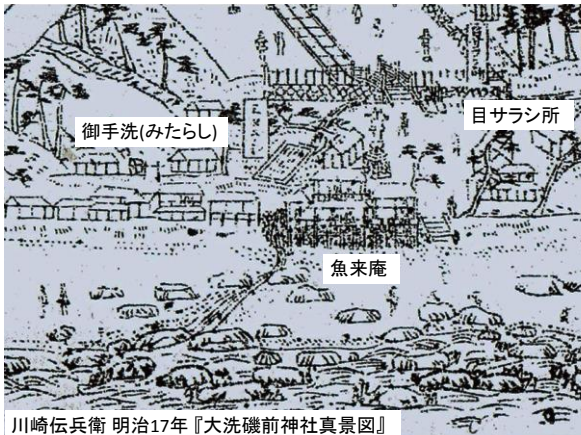
「…社会の進歩に伴ひ家屋を拡張し、最衛生上ニ注意を加へ、海水浴の外二日々新鮮なる海水温湯を設け、貴婦人方乃虚弱の御方の便ニ供し、又料理ハ朝夕漁れる處の鮮魚を用ひ…」

近代海水浴の成立・普及 (明治10年代前半)

- ・明治11年頃、横浜の本牧海岸、外人が海波に浴するものが頗る多く、その後、ここに海水浴場を建設した者がいた(明治35年『常陸の海水浴』)。
- ・明治12年7月6日、ベルツ、役人の依頼で、海水浴場適地の視察(江の島不適、片瀬と接する七里浜が適地と判断。『ベルツの日記』)
- ・明治13年7月13日、ベルツ、鍋島侯の子息2名を片瀬にやり海水浴治療を施す(『ベルツの日記』)。
- ・明治13年、品川の貸座敷松岡の主人・鳥山藤三郎、海水浴ができるように、貸座敷の裏の海の中へ築島をこしらえ、風呂場を建設計画(『読売新聞』明治13年9月5日)。※民間海水浴の勃興
- ・明治14年6月、長与専斎、『内務省衛生局雑誌』に「海水浴説」が特集される。
- ・同年8月、愛知病院長・後藤新平、愛知県大野の海水浴場において検査を実施。翌年3月、『海水浴功用論』を著す。

魚来庵の隆盛(明治10年代頃)

- ・明治16年10月27日、細川潤次郎が大洗を訪れ、近頃、養生を講じる者が多く、海に浴して喜んでいる(細川潤次郎 明治19年『近遊日録』)。 ※大洗における海水浴の初出。
- ・明治17年、川崎伝兵衛、大洗下初の見光案内『大洗磯前神社真景図』を発行。
- ・明治21年7月30日、小中村清矩(こなかむらきよのり)、長与専斎による書「酒煖魚来」が魚来庵に掲げられていることを確認する(小中村清矩 大正4年『有聲録』)。



川崎伝兵衛 明治17年『大洗磯前神社真景図』

魚来庵の隆盛(明治10年代頃)

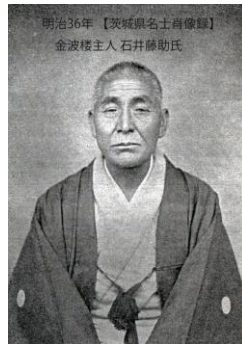
近代海水浴を普及させた内務省衛生局長を務めた長与専斎による近代海水浴が魚来庵に与えた影響。

- ・家屋拡張
 - ・海水温湯の設置
 - ・明治前期までの「魚来屋」の屋号を、新制海水浴を導入し、「魚来庵」と変更した。
- ※小中村は、魚来庵の名付け親は長与であったと言っている。

金波楼の建設 (明治21年夏)

建築の背景

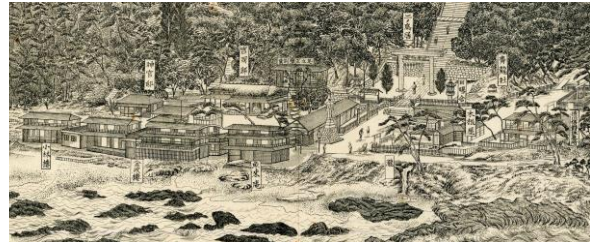
- ・明治10年代に近代海水浴を導入した魚来庵の成功。
- ・交通網・東海道線(品川～小田原区間)の整備に伴う、明治20年夏季までの東京・神奈川県下における近代海水浴の流行。
- ・明治20年5月、水戸鉄道(小山～水戸区間)の敷設許可。



明治21年夏季の大洗下の様子

江戸時代から続く小林楼・魚来庵・木根(杵)屋に加え、この年、金波楼が開業した。

田口勲 明治21年8月 『国幣中社大洗磯前神社真図』より



金波楼初代本館と別邸

里海邸所蔵

きたしらかわのみや よしひさ しんのう

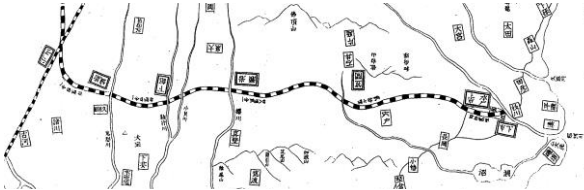
北白川宮能久親王の旅行

- ・明治21年8月13日～21日間の大洗旅行。
- ・安田茨城県知事に随行。
- ・涸沼川における投網、涸沼における舟遊・漁遊・蛸掻き・鰻捕り、大貫海岸における潮干狩、大洗海岸の散歩など。
- ・8月15・16日夜、金波楼へ宿泊。
- ・8月21日、小林楼において饗宴。

明治21年8月『東京日日新聞』・『読売新聞』などの新聞記事
詳細は、昭和2年『東茨城郡誌 上巻』より

水戸鉄道の開通

- ・明治20 (1887)年5月敷設許可。
- ・明治22(1889)年1月、小山―水戸区間全線開通。
- ・上野発―小山経由―水戸間が最短5時間で結ばれる。
- ・湊・大洗・平磯を束ねた「三浜」という、観光業とリンクした簡便な用語が成立。※明治21年12月『水戸鉄道線路案内』所載の「三ヶ濱」が初出



正岡子規・21歳

明治22年4月の水戸・大洗・磯浜旅行記

「(手漕ぎの)舟は(那珂川の)川口につきぬ 祝町的大门を出て行くこと半里余(あまり)砂の中を歩むこと数町にして又一ツの林に出づ 樹々のあはひに見ゆる薔(いらか)はこれなん大洗ひ神社なる 石階を下りて海浜に出れば料理屋四五軒あり 今新築にかゝれるたかどのは結構壯麗目を驚かす許りなればこれも料理屋にやと問へば然(さ)なり 鉄道の水戸へ通して已来(いらい)紳士のきますことも多ければ此夏の備へに設くるもの也といへり・・・」

正岡子規『水戸紀行』より

水戸鉄道の影響

- ・明治26年7月『平磯海水浴場誌』
「七八年前(7～8年前・明治18～19年夏季)より四方八方に聞え渡り、或は東京、或は上州、或は奥州と遠き国々よりも来る事とはなりぬ・・・」
「今を遡る事六七年前(6～7年前・明治19～20年夏季)迄は世人未だ平磯の如き海水浴場あるを知らざりしなり(中略)突然四方に響き及し名聲赫々(かくかく)として能(よく)大洗を凌ぐに至る・・・」
- ・水戸鉄道開通前後の明治21年夏季頃から三浜地方への海水浴客が増加したものとみられる。

竹久夢二・22歳

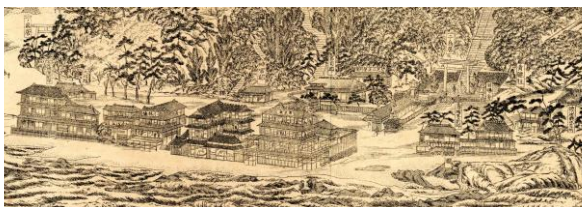
読売新聞社員時代の大洗旅行記

「大洗、朝、水戸公園の川岸より、大洗行の汽船に乗る。那珂川の流れにしたがひ、一時間ばかりにて、海門橋につく。ここより汽船を上れば、右は祝町、左は平磯町なり。自分は橋の袂で、大洗へゆく途をきくと、「旦那、安く行きますぜ」と、すれたもの言ひでいふ、車には乗らずに、祝町を南へぬける、町の両側は、悉く妓楼と引手茶屋とで、充されてゐる。町はづれから、路が二つに分れる、左は磯づたひの砂路で、車は通らぬ、ここから車を雇ひ、森を一巡すれば大洗町なり。西は鹿島灘をうけ、東は岬をなして、ここは大洗神社あり。海浜に、魚来庵、小林楼、金波楼、大洗ホテル等あり。近年、東京より避暑に来るもの極めて多く・・・」

明治40年6月22日読売新聞朝刊3面「涼しき土地(了)」より

明治40年代頃の大洗下の様子

金波楼は成功し、本館以外に、第1別邸(大洗ホテル)・第2別邸を建設する。本図では本館も瓦葺の2代目の建物に変わっている。魚来庵も明治30年代に3層の建物に建て替えられ、この後、徳川侯爵休息所を魚来庵別荘として利用するようになる。



石井藤助 明治40年代頃 『国幣中社大洗磯前神社全図』

海水浴旅館の内容



- ・宿泊:1～3階客室(畳・襖)、地下1階:海水温浴場(潮湯浴場)、宿泊料金:特別最上等1円50銭、特別75銭、通常(上等50銭・中等35銭・下等25銭)

※明治28年『大洗海水浴場誌』調べ

大洗下海水浴旅館宿泊の感想

「金波楼の三階は、吹き倒されるかと思ふほど涼しい。・・・風呂に入って、水貝と海老の鬼が焼で、冷たいビールを飲む心地良さは、千金を以てするも購(あがな)ひ難からう。未だ避暑客は一人も来て居ないが、水戸辺から芸妓を連れした一組が二室隔てた隣で、キヤツキヤツと騒ぐのが、手に取る様に聞える。夏の盛りになると、避暑時分に限って出稼ぎする女中が、一軒に十四五人も来て、随分賑やかになると云ふが、今は三階も二階も、大方は雨戸を閉めて居て、唯ガタガタと風に揺れる音が激しい。」

松崎天民 大正元年『淪落の女』より

祝町と大洗を結ぶ道

海門橋から南の祝町の市街地を抜けると、道が二手に分かれている。

1の道は北西方の磯浜町市街地へ向かう道、他方2の道が南方の大洗下へ向かう砂路である。

1の道は現在も機能し、2の道は大洗ゴルフ場内に入り、廃道となっている。



明治36年測図『五万分一地形図磯浜』より



海門橋の歴史

- 1代: 木橋。明治28年11月開通～同29年9月落橋。
- 2代: 木橋。現橋の約20～30m上流に架設。明治31年3月開通～大正6年10月破壊。
- 3代: 木橋。現橋の約50m上流に架設。大正7年12月開通～昭和5年11月。
- 4代: コンクリート橋(近代橋)。現橋の0～30m下流に架設、橋脚基部残存。昭和5年11月開通～昭和13年6月落橋。
- 5代目: 現コンクリート橋 昭和34年7月開通～現在。

主に、佐藤次男 平成16年『那珂湊市史(近代・現代)』より

磯節の波及 1～安中以前～

・明治24年春～同26年11月に朝野(ちやうや)新聞主筆を務め在京した川村 淳(じゅん)が、この頃大洗に遊んだ。その際、祝町から芸妓を呼び、磯節「松が見えますホノボノ」を聴き、気に入った。
この磯節を、帰途、水戸の茨城日報社長大関俊徳(としのり、明治26年8月死去)に伝えたところ、大工町の仇吉という老妓を祝町にやり、磯節を習得させたという。これが磯節が世に出る初めて、後に茨城県選出で衆議院議員を務める川村は、磯節は俺がひろめたのだと常に自慢していた。

※明治24年春～同26年8月頃、祝町→大工町に波及

弓削徳充 昭和28年『水戸上市の面影』より

蓼沼香未由 平成29年2月15日 第1回磯節勉強会配布資料『磯ぶし・磯節年譜』より

磯節の波及 2～安中以前～

- ・水戸地方の俗歌として古来特有の磯節が、今や水戸から伝播して東京、関西、奥北の花柳界で節を付けて唱えられている。
- ・この磯節は今日に至って、始めて世に出たものなり。

※磯節が中央に出て流行歌として一般的に知られるようになるのは、明治34年をさほど遡らない時期。

伊藤利男 明治34年4月『水戸』より

蓼沼香未由 平成29年2月15日 第1回磯節勉強会配布資料『磯ぶし・磯節年譜』より

磯節の波及 3 ～安中以前～

・近くは(明治35年の)67年の間(明治28～29年)に行はれし所の流行歌についても、とんがら節・拳骨節・愉快節・廣島節・とんとん節・ホーカイ節・きんらい節・磯節・東雲節等…。

・磯節は、もと大洗にて行はれし歌なるを、これに遊びし客の伝え来りしに(東京における流行が)起れり。

※大洗下の旅館に宿泊した中央の都人士が東京へ磯節を持ち帰り、明治28年頃以降、流行した。

平出鍾次郎 明治35年8月『東京風俗志 下巻』より
加倉井 東 平成29年9月 「『磯節』と暮島」『雲 第22号』より

まとめ ～明治大洗観光と磯節～

・明治22年1月の水戸鉄道の敷設に伴う、明治22年以降の三浜地方への海水浴客の増加。

・大洗への玄関口は、舟が着岸する那珂湊や祝町。

・祝町は、大洗下の魚来庵や金波楼へ向かう経路となり、交通網の結節点として重要度を増す。

・増えた浴客は、夜は大洗下に宿泊し、あるいは祝町を訪れて、祝町の芸妓で遊ぶようになる。

・このような観光客の増加が要因となって、祝町の芸妓抱置・引手茶屋を中心に、土地に伝わってきた里謡が整理され、提供されていったものとみられる。

・明治20年代半ばには、祝町から水戸の大工町へ磯節が伝播する。

・明治20年代後半以降、多様な成因が絡まり、東京・関西・東北などへ波及し、明治28年頃以降、全国的な流行歌へ成長する。